

英作文 — The easier, the better.

勝井 弘幸

1. はじめに

「このような簡単な英語でいいのですか。でも予習の段階ではひらめきませんでした」最難関といわれる国立大学が課した英作文問題を、授業で解説していたときにある1人の生徒がふと漏らした言葉である。国公立の二次試験の英作文と聞くだけで多くの生徒が「難しい。手が出ない」と初めから決めつけているが、解答を示すと意外に単純な英文で太刀打ちできることに気が付く。

本年度筆者は高校3年生のライティングを担当しているが、週に1度行うnative speaker とのteam-teaching が彼らの認識を大きく変えたようである。パートナーであるイギリス人 Adrian Smith の口癖は“The shorter, the better.”「手短で簡潔であればあるほど良い」彼は生徒が黒板に書いた長々と続く英文や複雑な修飾関係を持つ英文を、手短で簡潔にするように指示し、生徒の英文を破壊することなく添削する。そのような授業を通して生徒達はあまり難しく考えることなく、言いたいことを簡明に伝えることの大切さを学んだようである。また国公立二次試験ならきつと難しい語彙や構文を求めているに違いない、そしてそれらを用いなければならないという生徒の先入観と恐怖感をぬぐい去ることもできたと思う。この週に1度のteam-teaching は英作文で大切なことは与えられた日本語を解釈し直し、わかりやすい語彙で意図が伝わるようにすることであると示せる良い機会になっていると思う。確かに、話せる英語を目指して native speaker に英会話中心の授業をしてもらうのも大切であろうが、英作文の授業に参加して、じかに英文を添削してもらうことで、自分が書いた英語が案外通じるものだという快感を生徒に味わわせることも重要だと思う。「使える英語」といえば話し言葉と考えがちだが、現実的に依然読み書きとして英語に接するほうが多いのではなからうか。

筆者は普段の授業で繰り返し繰り返し「どんな難関大学の英作文であっても可能な限り中学生が理解できる英語で書く訓練をなささい」と伝えている。もちろんすべてが中学英語で対処できるわけではないが、問題を分析すると、求められる文構造や語彙の多くは中学～高校1年レベルが多いことがわかる。いかに自分が知っている語彙や構文を駆使するか、この訓練が辞書を使えない本番で役に立つことを強調し、予習段階では和英辞典に頼らないように指示している。筆者の授業スタイルは事前に担当生徒を決め、予習で作ってきた英文を黒板に書かせて添削するという古典的なものであるため、恥をかきたくないからか、初めのうちは和英辞典を使ってそこに載せられている語彙や例文を用いたり、英語が得意な友人に聞いてできた「模範解答」を書く生徒が少なくなかった。しかしこちらが求めているのは模範解答ではなく、悪戦苦闘してできた、間違いをたくさん含む英文であることを話し、正しくない英文を書いたほうがクラス全員にとって得るところが多いことを力説してようやく「完璧な英語」を書く生徒がなくなってきた。

英作文は丸覚えした語彙や構文をアウトプットするだけの作業と考えている限り、インプット量をいくら増やしても英語は書けるようにならない。英訳するのが難しい日本語に出会ったときに、自分の知っている基本的な語彙をいかに駆使するかが大切であるという私自身の信念を、本年度の team-teaching で再確認することができてとてもありがたいと感じている。日本人が到底思いつかないような簡潔な名文を授業中に目の当たりにして、生徒にとって勉強になると同時に、私自身が随分勉強になっているのである。

では以下で具体的に Adrian との team-teaching で気をつけていること、感じたところを述べていきたい。

2. 授業で

① まずは文全体の骨格、コツを日本語で説明

添削に入る前に、その日本語を英語にする際にどういった文法項目、構文が求められるのかを概略程度に述べる。そしてその骨組みのポイントを、赤チョークを用いて四角く囲い、目立つようにしている。また役立つコツを事前に伝えておく。例えば「資源の有効利用の重要性が叫ばれている」という文は、名詞のまとまり(名詞群)を動詞を含む文的な形に直して「資源を有効に利用することが大切だと言われている」とすれば断然書きやすくなる、などの情報を示す。そして「何がポイントか」という枠組みを示したうえで次に進む。英文を急に添削し始めるよりもねらいが明確にできると思う。

② native check = 寛容にしてもらう

生徒が黒板に書いた英作文を添削する際に Adrian が気をつけてくれていることがある。それはあまり厳格にならないということ、そして生徒の英文を必要以上に破壊しないということである。非文法的でなければまずその英文を評価し、その後個別の表現に関して不自然な箇所があれば「言いたいことはよくわかるし通じないでもないが、そういう英語は存在しない」と言って自然な英語に直してもらう。自力で懸命に書いた英語に対してプラスの評価してくれる場面を見て安心したのか、多くの生徒は辞書に頼らず自力で書こうと努めるようになり、ひと通りの解説が終わった後にどんどん質問するようになった。英文に厳格すぎないことは生徒にとって大切だと思う。質の良い英文を要求し、生徒の解答を切り刻んで添削する方法もあると思うが、そのような方法はプロの翻訳家を目指さない限り不必要な事だと感じる。まず大切なのは、尻込みせず自分の知っている範囲の英語を使って書いてみようと思わせることではなからうか。

③ 生徒の書いた英文をもとに簡潔でやさしく

生徒の英文をひと通りチェックした後で、Adrian にさらに簡潔で自然な英語を提供してもらうようにしている。時にはマニュアルの模範解答に準じた英文を示すこともあるが、基本的には native speaker の発想で書いてもらう。native speaker の発想だからとんでもない難解な英文や言い回しが使われそ

うな印象をお持ちの方もおられるだろうが、大半があっと思えるほど簡潔でやさしい英語である。これは native の考え方や英語らしい構造を身につける機会として大切にしている。生徒の多くは発想の違いと英語らしさを知ることができ、そして予想以上にやさしい英語で書けることを知り、とても喜んでいるようである。

④ 生徒が聞きたいと思う点を推測・準備・質問

基本的な英文構造を理解した後で生徒が知りたがるのは、別の語や句、形式で書き換えることができるのか、ということであると思う。その中で特に問題となるのは、いわゆる英語特有のコロケーションであろう。例えば、日本語を英語にする際に「かしこい」とあれば wise や clever, smart など選択肢が多いが、wise animal という英語は通例ない。「偶然旧友に出会った」なら I came across an old friend of mine. や I ran into a friend of mine. は言えるが「偶然その手紙を見つけた」なら I came across the letter. は認められるのに対して I ran into the letter. は認めにくい。このように動詞と目的語、形容詞と名詞、動詞と副詞などの関係は我々にとっては難しい問題であるが、具体的な対策はなく、最終的に覚えるしかない。代表的なコロケーションに関しては十分準備、整理しておいて、その都度 Adrian に質問して違いを説明してもらっている。さらに英語の感覚を養うため、それらのまとまりを Adrian に読んでもらい生徒にリピートさせている。「良い英文」「何となく不自然に感じる」という直感を身につけるにはこのような地道な方法しかないように思う。

また与えられた日本語をそのまま英語に置き換えてしまうミスも目立つことから、あらかじめ日本語からそのまま英語に直した不自然な英語をいくつか準備しておき、容認できるかどうか授業中に聞く。英訳を難しくする要因の1つが日本語特有の表現をいかに自然な英語に直すかという点にあると思うので、そのあたりの対処法も身につけてもらいたいと期待しつつ授業中に取り上げている。

⑤ 英語で説明を聞かせる、質問をさせる

生徒にとって一番気になるのは自分が書いてきた英語が容認できるかできないかであろう。本授業で

は1文の解説を終えれば必ず質問タイムを設ける。場合によってはその質問、解説だけで20分近くかかることがある。中にはどんどん速く進みたいと感じている生徒もいるが、大半は興味深く聞いている。Adrian はまったくと言っていいほど日本語が話せないで、文法説明、理由説明等すべて英語である。そのため英作文の授業=リスニングの練習にもなっている。また露骨に否定しない Adrian の人柄を知ってか、多くの生徒が様々な質問をぶつける。日本語で筆者に聞いて来る生徒が多いが、中には英語で直接聞こうとする生徒もいて、スピーキングの練習にもなっているのである。英語で自分の解答の是非を質問し、英語で説明を聞き、音読する。生徒にとって Adrian とのやりとりは話せる英語を目指す貴重な体験ではなからうか。

⑥ 多くの生徒が自分の英語に自信を持った

個人的な感想であるが、日本人教師は英文の添削に厳格で、格調の高い模範解答にこだわりすぎる傾向にないだろうか。筆者自身の実体験として格好の良い高度な模範解答を示したときに英語が得意な生徒の目が輝くのをたびたび見てきたし、気の利いた英語を教えているというある種の優越感を抱かないでもなかった。しかしマニュアルや解答集の英語の多くはキチッとした立派な英語であり、生徒が自力で考えられないようなものも少なくない。せっかく自分が予習で書いてきた英語が黒板で大幅に訂正され、最終的に模範解答を覚えさせようとする雰囲気を作ってしまうのであれば、生徒にとっては百害あって一利なしと言えるだろう。日本人の気質なのか、英作文の採点に関して本校にも all or nothing 的な発想をする生徒がいるが、team-teachingを通して彼らは自分たちが書いた英文に対して native speaker が意外と柔軟であり、曖昧であり、基本的な文法規則を守っていれば訂正されないことに気がついてきた。そして肩に力を入れず自信をもって堂々と英語を書き始めるようになってきた。ありがたいことである。

3. 簡単な英語 “The easier, the better.” の実践例

ここでは具体的にどのような英文が添削されたか実際に国立二次試験で出題されたものを題材にして

いくつか紹介したい。

①「何の前ぶれもなしにやって参りました失礼をお許し下さい」

生徒は「許す」から excuse を考え excuse ... for ~ という表現を使い、さらに「何の前ぶれもなしに」を「知らせずに」という日本語に変えたが、その表現がわからないため辞書で unannounced を見つけ、

Please excuse me for dropping in unannounced.

と書いた。文法的に問題がないと言ってその英文を評価した後で、Adrian は

I'm sorry to come without telling you.

という英文を提示した。なるほど簡潔でわかりやすい。さらに without telling you 以外に native speaker は簡潔に without notice という表現もよく使うと付け加えた。without notice はなかなか思いつかない英語らしい表現で生徒が自力で思いつくと言うより知識として知る程度のものであろう。ちなみに模範解答として解答集に提示されていた英文は

Please forgive me for dropping in unannounced.

である。

最後に「前ぶれもなしにやって参りました失礼」という名詞群は文的に書き換え、動詞が中心となる日本語にしてから考えるほうが英語にしやすいということをやとして付け加えておいた。

②「今日の先生の授業を休ませていただきたいのですが、よろしいでしょうか。」

ここで示された日本語を忠実に英語に訳して、

Today I would like to be absent from teacher's class, but is it all right to do so?

と1人の生徒が黒板に書いた。日本語をそのまま英語に置き換えた例である。この英文に対して Adrian は “It's completely clear and easy to understand, but ...” と言って何箇所か訂正した。まず接続詞の but である。日本語はしばしば助詞「が」を使うが、英語の but は明確な逆接であり、その誤用は日本人に多く見られることを説明して、but を使う例と使わない例を紹介した。また「先生の」は teacher's としてしまいがちだが、英語の teacher は呼びかけで用いず、「あなたの」と簡潔に示すと解説した。

また上のように2文にわけて回りくどく言うのは日本語の典型であり、英語では簡潔に示すことを述べた上で簡単に

May I be absent from your class today?

と書いた。単純明快である。さらにしばしばアメリカで用いる用法であるとして

May I be excused from attending your class today?

も紹介してくれた。参考までに模範解答は以下の通りである。

Will it be all right to be excused from attending your class today?

4. 最後に

英作文の授業を担当する際に、タイトルに示した“The easier, the better.”以外に心がけていることがある。それは出会った文を「対処療法」で対応しないということである。無数に存在する問題をその場その場での対応に終始していたら、いくら時間があっても間に合わない。そこで授業ではその1文を勉強することで、限りなく多くの英作文問題に対応できる指針をできるだけ多く示すよう心がけている。その指針の1つが先に挙げた「名詞群→文的に」というものである。時には示すだけではなく実際に訓練することもある。これらの指針を出会う問題ごとに示せば、無数の日本文に対応することも夢ではないかもしれない。日本文と英文の言語的、文化的相違点を明示することで少しでもそれらしい英語(意外と単純明快な英語)が書きやすくなるように思われる。また Adrian は市販されている日本人のミス集を研究するだけでなく、実際に生徒が提出した英作文をコンピュータに入力し、現在教えている生徒の弱点も見極めてくれている。そのことで随分生徒の現状を理解してくれたようである。その場その場で解説して終わるのではなく、体系的に研究し、そのデータをもとに指導の手助けをしてくれる native speaker の存在は本当に大きいし、感謝している。彼はまた筆者とメールでやり取りし、情報提供、英語チェック、質問の返事をしてくれる大切な友人でもある。今後とも彼の生の英語に助けられ、勉強していきたいと思う。

参考文献

太田千義 編(1997)『新・英作文300選』日栄社

(智辯学園和歌山中学・高等学校教諭)